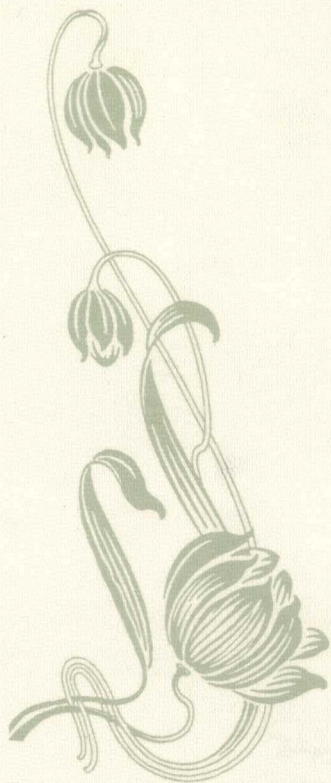


花は葉に

近藤千雅句集



句集

花は葉に



近藤千雅



句集 花は葉に 知音青炎叢書第二篇

二〇〇一年九月二〇日

著者——近藤千雅

発行人——山岡喜美子

発行所——ふらんす堂

〒182-0002 東京都調布市仙川町一—九—六一—一〇二

電話——〇三（三三三三六）九〇六一 FAX〇三（三三三三六）六九一九

ホームページ <http://www.ifnet.or.jp/fragie> Email fragie@apple.ifnet.or.jp

振替——〇〇—七〇—一—一八四—一七三

印刷所——トーヨー社

製本所——並木製本

定価——本体二一〇〇円＋税

ISBN4-89402-427-6 C0092 ¥2100E

序

あれは何年前のことだっただろう。私が関西に移り住んで間もない頃だったから、もう十数年前のことになるかも知れない。俳人協会主催の夏期指導講座という中学高校の先生方のための俳句指導講座が大阪で行われて、私もスタッフの一員として加わっていた。その日の講師の一人は府内の高校の近藤先生で、生徒達の俳句作品と共に、生徒が表現したかったことを描いた絵を紹介するという、興味深い授業報告だった。

十七音の器には盛り込みきれない高校生達の感動や、怒りや虚しさ、様々の絵に表われていた。教材として教科書に載っている作品から想像した世界を描いたものもあった。生徒にとって退屈きわまりなかった俳句の授業が、俄然生き生きしたものになった、という報告もうなづけた。

何よりも感動したのは、十代の高校生の心の中には、表現したい、わかっている、何か溢れているのだが、その手段を知らない、言葉が見つからないという状態であったのを、近藤先生の導きによってわずかでもその本音が表わせたということだった。決して上手とは言えない絵の中に、ゴツゴツした心の塊や、キラキラした詩ごころや、淋しい眩きや、憤懣や無氣力が見てとれた。表現の原点を見た思いがした。

講座終了後、講師の方々とお茶を飲もうということになったが、近藤先生は既に帰られたとのことだった。もつと話が聞きたかったのに、という思いが残った。

その時の近藤先生と、数年後にカルチャーセンターの句会に表われた千雅さんとが、同一人物だったとわかるまでに、しばらく時間がかかった。それほどあの時の壇上の近藤先生と、いつも一番後ろの目立たない席に座っている千雅さんとは違っていた。

あとから知ったことだが、あの後数年、千雅さんは句作を中断していたという。もうやめたつもりだったが、やはり俳句は捨てきれず、土曜日の午後の句会を覗い

てみたのだそうだ。初心者です、と言っていたが、そうでないことは句を見ればすぐわかった。その頃は迷いもあったようだ。

今度句集を編むにあたって、今までの作品をすべて読んだ。そこには紛れもない近藤千雅さんの全貌が語られていた。勢いのある青春時代、教師としての喜び、迷い、悩み。女性としての心の揺れも、冷静な目も、潔い覚悟も、人生の陰翳も、一句一句に表われていた。

大緑蔭デイスカッションの輪のできて
爽やかや講義のペース順調に
ふらここをこぎて失恋忘れけり
ハンドルを握りぬ洗ひ髪のまま
男のうそ聞きつつ我はビール干す

俳句を始めて間もない頃の作品である。これらの句は明るくて前向きだ。緑蔭の中のデイスカッションは建設的なものであらうと想像される。樹々の匂いと風の中では、人は健康的な思考をすることができる。教室の窓から入って来る風は心地よ

く、そこに見える空は高い。澄んだ空気の中で自分の声が教室の隅々までとおり、生徒の手応えも十分。順調に進んでゆく講義に教師としての快感を覚えるひと時であらう。

失恋でさえ深刻になつていない。傷手は傷手だが、ぶらんこを漕いでいるうちに楽しい気分になつて、すぐに立ち直れる若さがそこにはある。洗い髪が乾く間も待てずに自ら運転してゆく先は、心弾む場所に違いない。男のうそがわかつていてビールを干した作者はすぐにその席を立つたのであらう。男が完全に負けている。明るく、自信に満ちて、常に前進する作者が見えて来る。

一生 徒 握 手 を 拒 み 卒 業 す
プールより 歓声聞こえ 講義倦む
弔 辞 読 む 生徒に 雪の 降り 初 む
大 試 験 傘 を 忘 れ て 帰 り け り
毛 糸 編 む 頭 の 中 に 一 生 徒

その職業柄、生徒を詠んだ句、教師である自分を詠んだ句が多い。日常の中から

句を作ることは難しいが、日常の中でふと心が止まったり、自らを省みたりする時、作品として結晶する。

卒業生の皆と握手をして見送った、ということだけならおそらく句にはならなかっただろう。同じように、前に揚げた句のごとくいつも順調に授業が進んでいたら、教師の倦怠感とは無縁だ。長い教員生活の間には、生徒の死という悲しみも体験したことだろう。降り出した雪は、若くして逝った生徒と、弔辞を読まねばならない生徒のあわれをきわ立たせている。試験会場にポツンと残った傘。試験のことで頭が一杯であの子は帰ってしまったのだ。

「毛糸編む」とは、教師とは無縁の行為だ。むしろ教師としての日常から、個人時間を取り戻したいためにする行為だったはずだ。しかし、毛糸を編みながらもある生徒のことが頭から離れない。この句、「心の中」ではないことに注目したい。ほのぼのとした思いではなく、気がかりや心配が「頭の中」を占めているのだ。

シヤンデリア涼しスターの足長し
学校を捨てやう春の野に出やう
教師には向かない男おでん酒

読み進むにつれて、この作者の魅力は何事もズバリと言い切る潔さにあることに
気づく。思いきりのよい比喻、明快な表現、人をつき動かす直線的な言葉の力、迷
いのない判断。鋭い切り口と本質を見抜く洞察力が不可欠の俳句という表現形式が、
やはりこの人には合っていたのだ。

執刀医視線合はさず水中花

この句からは視線を合わそうとしない執刀医の目よりも、むしろ作者のまっ直な
意志に満ちた視線を私は感じる。何事もそのまま受け止める強い心用意があつて、
執刀医を見つめているからこそ、相手の視線が気になるのだ。水中花は、水中に放
たれて始めて咲く不自然な花だ。人工的なその花の鮮やかさは、異和感を覚えてい
る作者の心持ちを象徴していよう。

いい人をやめんと思ふサングラス
どこまでもひとりと思ふ花は葉に
使はない臓器がひとつ冴返る

ズバリと言い切る潔さは自分を詠む時にも鈍らない。それは日々の生活、さらにはその積み重ねである人生に、覚悟をもつて臨んでいるからだろう。

しかし、もしこの句集が、そうした強い意志と見事な覚悟だけの句であつたなら、魅力は半減したことだろう。作者の内省の目は、正直にその迷いや陰の部分にも向けられ、人生の陰翳をも表現しようとしている。

転職を考へてをる端居かな
病名をいつはりメロン食べにけり
後遺症出ずして年の終はりけり
年齢を聞きたがる人若葉冷
回り道ばかりしてをり鯛雲

さり気なく端居している心の中で、転職を考えている。メロンを口に運ぶ甘い時間に、ほんとうの病名は言いたくない。いつも気にかかっていた後遺症が出ないまま、年を越すことができた安堵。相手の無神経さに心が冷える思い。ああ私はどうしていつもこうなんだろう、と、自分の要領の悪さにあきれている。だが鰯雲は、決して暗く落ち込んではいない心を表わしている。限らない未来が広がっているように、ゆるやかに遥かなものへ心を誘う。

ぬひぐるみ答へてくれず秋の夜

いつも忙しく過ごしていても、秋の夜にはしみじみものを考えたり、以前のことが思い出されたりするものだ。何か悩みか迷いがあつたのかも知れない。いつも思いをぶつけているぬいぐるみに向かって、問いかけたくなつたのだろう。しかし、言うまでもなく、ぬいぐるみが答えるはずもない。そのあたりまえのことが、一句を淋しくしている。人はこんな折に、自分が何を望んでいるのかを知ってしまうものだ。

花は葉に久女の謎は謎のまま

杉田久女という女流俳人の生涯を思う時、数々の謎にゆきあたる。あれほど虚子に心酔していたのに、何故「ホトトギス」を除名されたのだろう。伝えられる言動は皆本当のことなのだろうか。久女に取材した小説や芝居も多い。だがいくらそれらを読んでも、ゆかりの地を訪ねても、その謎が解けるはずもない。人間関係や人の心の奥底は、はかり知れないものだ。

「花は葉に」は、眼前の景を言い止めていると同時に、時の移りゆきを表わした言葉だ。久女に関わる謎は謎のまま、すべてをのみ込んで時は過ぎてゆく。何か達観したような句だが、それだけではない。「久女の謎」には哀しみがある。胸のうちに烈しいものを抱き、破綻を招くような生き方しかできなかった女性の生涯に寄せる思いがこめられている。

この句を始めとして、最近の作には以前にも増して本質に迫まる意欲が加わって来た。季語を生かす試みが見えて来た。これからの人生で、迷うことはまだまだあるだろうが、俳句を作り続けることへの迷いは、もはやないだろう。

最近赴任した高校では、俳句実作指導も意欲的に行なっていると聞く。それはとりもなおさず、千雅さん自身の俳句に対する情熱の表われだ。一度は捨てた俳句を、自分の表現手段としてもう一度取り戻した千雅さんの賢明さに拍手を送りたい。そしてそれを支えた幸運と縁を、共に喜びたい。

平成十三年 夏

西村 和子

近藤千雅句集*花は葉に 目次

序・西村和子

熱気球

15

飛行船

81

鳥雲に

141

あとがき

近藤千雅句集

花は葉に

